

看護 diary

4 東 病棟



「患者さんの思いを知るために・・・」

卒後 2 年目 氏名：長津 郁哉

私は入職後2年間、障害者病棟で勤務をしています。毎日知識や技術不足に痛感し、先輩方に教えて頂くことで日々新たな学びを得ております。昨年、脊髄の感染症で腰痛がある患者さんを受け持たせていただきました。1年目だった私には、酷い痛みによる睡眠不足や苦痛に悩まされる患者さんに対して、痛み止めを渡すことしか出来ずにいました。看護の方向性について悩んでいる時に指導をいただき、痛みの強さ、性質、持続時間など聞く事で痛み止めを変更して苦痛の軽減を図ることができました。痛みが軽減したことで睡眠不足も改善し、挨拶をする時に、「今日は長津さんなんだ。来てくれて嬉しいよ。」と言われることが増えました。この言葉を聞いた時に苦痛の緩和をできたことで患者さんの笑顔を見ることができ、看護のやりがいを体感することができました。それから私は、患者さんの苦痛や思いの表出ができるように、ベッドサイドに寄り添うことを心がけて仕事に取り組んでいます。患者さんは身体的な痛み以外にも、入院することで孤独感や今までできていたことができなくなった現実との葛藤する気持ちなど精神的苦痛があります。それらの苦痛の緩和を図れるようにこれからもベッドサイドに寄り添い、生活の支えになるように努力していきたいと思えます。